

とへかした玉ぐしの葉にみがくれて鴟の草ぐきめぢならずとも。○註 太玉串の神の葉かけに、鴟の草隠せしやうに深フカがくれてをれば、そなたより見おこす目路メヂの間には、吾不在ワラハラスとも尋問來かしの心也、此歌によめるも、神宮にもてはやす玉ぐしの木にて、櫛カシなるべし、下總國香取郡神崎神社に、ナンジャモンジャといふ木あり、何ぞや物ぞ、これも櫛カシの一種也、また日向國高千穂峯をかだまの木とよぶものあり、伊勢丹波などにもありといへり。○註 常葉の香木にて、赤實房をなせば、小香玉コカズといふ名おへるはむべなれど、さる少マシなるものをのみとり出て、神事にもちふべくもあらねば、久須多夫クヌタ、大比オホヒ、白多夫シロタなど、すべて櫛カシといへること疑べからず、高千穂のをか玉の木は、から國の廣心樹のよし、岩崎氏説なり、

〔夫木和歌抄二十九〕柿本影供百首

後九條内大臣

山人も月をちぎりの秋よりやかつらの花のころもうつらん

〔紀伊續風土記 物産六下〕加都良カツラ古事記、萬葉集カツラノキ、新撰字鏡橋、書紀に杜の字を用ひ、本草

乎ミ加豆カマ莢カと訓ミ、雌雄メオスに分ちしはうけがたし、葉は白楊に似て薄く、縦道ありて、邊に鋸齒あり、葉の莖長し、三四日葉間に豆花の如き花を開き、後に角を結ぶ、秋に至り葉色黄に變ず、牟婁郡山中所々に産す、又那賀郡麻生津莊西脇村の桂谷は、此樹を産するをもて名づく、此谷二

に分れ、其間二町許、西の谷にあるを雄カヅラといふ、古は大樹なりしが、枯れて、今あるものは一窠三株にして、三株合して周五丈餘もあり、東の谷にあるを雌カヅラといふ、これも今三株にして、合して周三丈餘あり、皆末にて數十幹に分る、土人いふ、此木を採り歸る者は、己が家火災ありとて、枯枝落葉も採るものなし、故に天年を保ちて、此の如く大樹となるといふ、加茂葵祭に用ふるものはなり、

〔和漢三才圖會八十二〕桂 桂和名加豆和名 肉桂之桂名、女加豆良

本綱、桂葉如柏葉、澤黑、皮黃、心赤、謂之單字桂、不藥入用、